

少年音楽家(三)

東京女高師教授 岡田美津

三、谷

六月の日の長い黄昏が夜に變はつても一向に暗くない程、月の光が冴えてゐた。家の方から見渡すと、納屋も、その先の低い小屋も、薄暗くポツと美しく浮き出て居た。多かつた一日の用事がうまく果せたので、今こそ心置きなく身體と精神とを憩められると新右衛門夫婦は、家の横手の縁に坐つた。

新右衛門が戸内へ入らうと立ち上つた拍子に、ブーッと長いイオリンの音が聞こえて來た。

「お前さん、あれや何。」と内儀さんが大聲を出した。良人は返事をしないでその眼は納屋を見据ゑてゐた。

また一音鳴り響いたので、

「御前さん、バイオリンだよ、宅の納屋で。」と御内儀さんが叫んだ。

新右衛門はきつとなつた。忌々しげな聲を出して、

彼は縁を横切り、臺所へ入つて、すぐと、火を點じた提燈を持つて戻つて來た。

「御前さん——御止しなさいよ——何が居るか分らないから。」と御内儀さんは慄へ聲で制めた。

男は劍突を喰はせた。

「バイオリンは手が無く、ちや弾けないや。御前おれを見せにやらねいで酔漢ひの、途方もねい旅樂師の野郎に、うちの納屋を取られてもいゝッていふのか。先刻歸り途に路傍でいゝ格好の二人連を見掛けたよ。大人と子供でな、バイオリンを二挺持つてゐたつけ。彼等の所爲だらう大方。——こんな所までどうして奴等やつて來たか、解らねいがな。あんな宿無者達に納屋を使はれてかまはねいかよ。」

「構はないつて事はないが。」と御内儀さんは臆したやうに云つて慄へ——立ち上り、裏庭を向ふと夫

の影を追つて行つた。

夫婦は納屋へ入ると思はず立ち停つた。バイオリンの音が急調に顫音に、快調に、四邊に充ち満ちて居た。怒りの聲と共に新右衛門は狭い階段から屋根裏に登つて行つた。内儀さんはすぐ後に引添つて居たので、夫とほと／＼同時に、月光をまともに浴びて枯草の上に横臥してゐる男を見付けた。

忽ち樂の音が細々となつて低い人聲が闇の中——屋根の明り取りから眞四角に射し入る月光の及ばぬあたりから聞こえた。

「どうか、なるたけ静にして下さいね。この人今眠つてゐます。大變疲れてゐるんです。」とその聲が云つた。

階段の上の男も女も呆れ驚いて、しばし足を停めた。それから、男は提燈を差し上げて聲のする方へ、のさ／＼歩いた。

「貴様は何者だ。こゝで何をしてゐる。」と鋭く答めた。

少年の圓い日に焦けた、幾分心配さうな顔が闇の中にはっきり映つた。

「あのどうぞ、もつと小さな聲で仰つて下さい。」と

彼は哀願した。「この人は大變草臥れてゐるです。僕は民雄で、之は父さん。こゝへ來て休んで眠ンです。」

新右衛門は、打解けない顔を少年から移して、草の上に仆れて居る男を見渡した。彼は忽ち提燈を低くし、用心深く片手を伸して、低く身を差し寄せた。そして口の内で素氣なく何か言つて、身を起こした。それから腹立たしげに、

「こゝら、貴様、こんな時に何だてバイオリンで舞蹈の曲なんか弾くんた。」

「でも、父さんが弾いてくれて仰つたから。」と少年は欣然と答へた。「すると、小川のさゝめきを聴きながら、緑の林の中を歩いてゐる心持になれるって、そして鳥だの栗鼠だのが……」

「こゝら貴様は何者だ。何處から來たんだ。」と新右衛門は鋭く横槍を入れた。

「家から」。

「どこにあるんだ」。

「家——僕の住つてゐる家。山のずっと高い／＼——それや、高いところなんです。そして大きな大きな空が見えて、此處よりも、よっぽどいいです」。

少年の聲は慄へて途切れさうで、その眼は、始終、

草の上の父の白い顔に注いでゐた。

どうか處置をせねばと、此時急に新右衛門は、氣が付いた。

「この子供を家へ連れてゆきなさい。」と手厳しく彼は指圖をした。「今夜は、泊めてやらなくっちゃなまゐるまい。

おれは銀田のどこへ行つて来る——あの男の手にこの一切を移さなくちやなるめいから。御前、こゝに用は無い。」と御内儀さんの物言ひたげな顔付を見て彼は言ひ足した。「こゝはこの儘にして置け。その男は死んでるんだ」。

「死んでゐる？」

少年は鋭く一聲叫んだが、その聲に怖れよりも、驚き怪しむ心持の方が表はれて居た。

「父さんはあの——小川の水みたやうに——遠い國へいつてしまったんですか。」と彼はよどみ／＼訊いた。新右衛門は眼を見張つた。それから、一層はつきりした調子で、

「御前の爺さんは死んだだよ」。

「そして、もう歸つていらつしやらないの」。といふ民雄は泣聲になつた。

誰も返事をしなかつた。内儀さんは鳴咽するやうに呼吸をして顔を背向けてしまった。さすがの新右衛門も少年の訴へるやうな眼を見得なかつた。

民雄はアツ：といひさま、父の傍に跳んでいつた。「だって、父さんは此處にいらつしやる——チャンと此處にいらつしやる。」と早高聲に拒つた。「父さん、父さん、僕に何か言つて頂戴！民雄ですよ」。といつて、手を伸してソツと父の顔に觸れた。そして忽ち手を退き、恐ろしさに眼を圓くして、

「父さんは居ない——いつてしまった」。

と氣が狂つたらしく喋り出した。

「こゝに居るのは解る方の父さんでない。あとに置いて行くあの部分のなんだ。父さんは之を置いていつたんだ。——栗鼠だの、小川の水みたやうに」。

忽ち少年の表情が變つた。冴え／＼と悦ばしい顔をして跳び起きながら歡喜の聲で、

「父さんは、僕に弾いてくれと仰つたから、父さんは歌を唱ひながら——同歌ひながら——行くんだつて仰つた通りに——いらしたんだ。父さんが、小川のさゝめきを聴きながら、緑の林の中を歩いて行くやうに、僕がして上げたッ！聞いていらつしや

い、かういふ風に」

と、少年はバイオリンを頤に當てた。呆れ惑つてゐる新右衛門夫婦の耳には、また樂の音が軽く戦々、波に躍つた。暫らくは夫婦ともに言語も無かつた。

二人の生活——あの平凡な、馴れて苦にもならない野良仕事や、鍋釜洗ひ——の生活と、この光景——月の射し込む納屋、死んでゐる見知らぬ人、その子が小川だの栗鼠だのと面白さうに話をして、哀歌のかはりにバイオリンで舞蹈の曲を弾いてゐる——とは似ても似つかぬものであつた。やつと新右衛門は聲を出して、

「オイ、止せ！」と彼は怒鳴つた。

「貴様は氣狂ひ——ほんとに氣狂ひか。家へ行けつていふのに。」

少年は自失とした風であつたが、それでも穩順にバイオリンを仕舞つて内儀さんの後に蹤いて行つた。内儀さんは、涙で前後も見えぬ眼をして、階段を下へと案内した。

内儀さんは怖いと思つたが、また何とも知らず胸が迫るやうに覺えた。彼女の昔の記憶の中から別のバイオリンの音が——やつぱり少年の奏でたバイオ

リンの音が響いて來た。併し内儀さんはその事を考へたくなかつたのである。

臺所に入つてから、内儀さんは振り向いて少年を觀た。

「御腹が空いてゐるかい。」

民雄は躊躇した。女、牛乳、金貨の一件を忘れて居なかつたから。

「御腹が空いてゐるの——坊や」と内儀さんは口重くまた言つた。すると民雄の空き腹が言ふまいとす唇につい「はい」と言はせてしまつた。之を聽くと忽ち内儀は食物置場へ行つて、パンに、牛乳に、御まけに、民雄の見た事もない「ドウナツ」を山盛り皿に入れて持つて來た。

空腹な時に世間の子供が食べるやうに、民雄は、食べた。内儀さんは、與へた食物で御腹の空いたのが直る、かうした、ありふれた事實を現在に目撃して、すこし安心し、この風變りの少年も、やつぱり、さう變でないのかも知れないとやう／＼思ふやうになつた。

「何といふ名だへ。」思ひきつて尋ねて見た。

「民雄。」

「苗字は。」

「たゞ民雄。」

「だつて御爺さんの名は？」と口先まで出て來たのを内儀さんはやつと止めた。父の事を言ひ出したくなかつたので、

「どこに住まつてるの。」とこんどは訊いてみた。

「ずつと高い山の上。その山の上でね、毎日僕の銀の湖が見えるんです。」

「だつて一人でそこに居たんぢや無かろう。」

「え父さんと——父さんが——あの、行つてしまはなかつたうちは。」と少年は淀み／＼答へた。

女は失策つたと思つて、赤くなつて唇を噛んだ。

「その事でなくね、——御前の家の他に家はなかつたのかへと。」彼女は口籠つた。

「え。」

「だつて御母さんはゐなかつたの——何處かに。」

「え、父さんの衣袋の中に。」

問ひ主があまり呆れた様子をしたので、民雄も少なからず驚いて、説明した。

「あゝ解らないんですね。母さんは天使になつてゐるんです。天使の母さんは寫真だけで、何にも此世に

置いておかないんです。その寫真をね、僕達は持つて居るの、父さんがいつでも衣袋の中に入れていらした。」

「さうかへと。」小聲にいつて、内儀さんは、はや眼に露を宿した居た。そこで優しく、

「そして、始終そこにゐたの——その山に？」

「六年居たつて父さんがいひました」

「でも一日中何をしてゐたの。たまには——淋しくなかつたかへ。」

「淋しい？」と少年の眼は不審さうだつた。

「あゝ、いろんな人だの、家だの、御前位の年の子供だの——何だのそういふものが戀しくはなかつたかへ。」

民雄の眼はまるくなつた。

「そんな事はありやしない。」と彼は叫んだ。

「父さんと、バイオリンと、銀の湖とあつて、それから大きな、廣い林があつて、話してやつたり話してくれるものがそんな中に一杯居るんですもの。」

「林があつて、その中のものが——話をしてくれるつて！」

「え。」あの死ぬつて事を教へてくれたのも栗鼠で

ね、その次には、小川だつたの。そしてね……」

「あ、そうだ、もういゝよ。」と女は口籠りながら急いで起ち上つた、——この子はやっぱり、ちと氣が變なのだと心の中に思つた。

「御前もう寝なくツちやいけけない。鞆かばんだか——何だか持つて來たかへ。」

「いゝえ。置いて來たんです。」と民雄は含笑して言譯をした。「中にあんまりいろ／＼入れてあつたので、重くて持つてなくなつちまつたんです。だから持つて來なかつたの。」

「あんまりいろ／＼入れてあつたんで、持つて來なかつたツて、まあ！」と口の内で内儀さんは繰返して、手が付けられないといふ態度で兩手をさし舉げた。

「御前は何者だへ、一體。」

問ひかけたわけでもなかつたのだが、少年が正直に無邪氣に答へたので内儀さんは吃驚くりしてしまつた。

「父さんがかう仰いましたよ。僕は人生といふ管絃オケ樂の中に小樂器ですツて。だから、いつでも調子をよく整へて、拍子をのばしたり、ちがつた音を出さないやうに、氣を注げなくツちやいけないつて。」

「まあ」と言つて、女は少年を見据ゑながら椅子に腰を下してしまつた。それから又、骨を折つて立ち上つた。

「さ、床とこに御入り。寝るのが——一番御前に宜さうだ。入用なものは——貸して上げるから」

それから間もなく民雄は、臺所の眞上まきへのちいさな室に唯一人になつた。此室はもと民雄位の年の男兒の室だつたのだが、民雄は變たところだと思つた。

牀ゆかには、生れて始めて見た敷物が敷いてあつた。壁には釣竿、玩具の鐵砲があり、身慄が出る程恐ろしい事には、甲蟲かぶとむしや蛾のピンで刺されてゐるのが一杯入つてゐる函もあつた。寢臺は四隅に柱があつて、上部がブク／＼してゐるから、民雄は、どうして其上に登あがるのだから、また登あがれたとしても、どうしてそこに落付いて居られるのだから分らなかつた。それから男兒用の黄ばんだ白地の寢衣ねまきが一枚椅子の上にあつた。之は御内儀さんがその端で涙をいそいで拭いて置いていつたものであつた。蠟燭の火の届く範圍で民雄の我家戀しい眼に、見馴れたものは唯一つあつた。——自分が持つて來た、そして大事なバイオリンの入つてゐる長い黒い函であつた。

壁の上のピン刺しになつてゐる甲蟲と蛾に態と背を向けて、民雄は黄ばんだ白地の寝衣に換へた。襦ひたの中ひたに漂ふ匂が松林まつばやしの香に似てゐたので、嬉しくそれを嗅ぎながら。そして彼は唯一つある窓の方へ探り／＼歩み寄つた。

月はまだ照つて居たが、繁り合つた樹の爲に戸外がよく見えなかつた。下の庭の方から、車の音と、激びきした人聲が聞こえた。忙しさうに持ち運ぶ提燈のチラ／＼するのが見え、ひきづり足に歩く音もきこえた。民雄は窓のところで身慄こひした。山、岡、谷の廣い見晴しもなく、銀湖もなく、心を安める静さも、父さんもなく、——つまり實在する美しい「もの」は何一つもなかつた。唯あるものは、侘しい、空な賸あまの「もの」ばかりであつた。

ずつとしてから民雄は腕うでにバイオリンを抱へて敷物の上に仆れ、赤ン坊の時か以來やつた事のない泣き寢入をしまつた。併し身體の休まる睡眠ねむりではなかつた彼は自分が大きな白羽の蛾になつて、眞黒な空へ、星のピンで刺し貫かれてゐるところを夢に見てゐたのである。

○文部省保育講習會

例年の通り今夏も文部省に於て保育講習會開催の由。當年は左の通り内定、尙詳細は追て官報に發表の筈。

一、兒童の繪畫について

東京女高師教授

菅原教造

一、簡易なる玩具の製作

東京女高師講師

藤五代策

一、育兒に關する衛生

東京女高師講師

青木醇一